「日本語学」特集テーマ別ファイル

普及版

宮地裕・甲斐睦朗【編】

意味 4

擬音語・擬態語／色彩語

明治書院

「日本語学」特集テーマ別ファイル 普及版

宮地裕・甲斐睦朗【編】

意味 4

擬音語・擬態語／色彩語

明治書院

「日本語学」特集テーマ別ファイル 普及版
意味 4

2008年 6 月10日　初版発行

編　者　宮地　裕
　　甲斐睦朗

発行者　株式会社 明治書院
　　代表者　三樹　敏

印刷者　藤原印刷株式会社
　　代表者　藤原愛子

発行所　株式会社 明治書院

〒169-0072　東京都新宿区大久保1-1-7
TEL 03-5292-0117(代)　FAX 03-5292-6182
振替口座　00130-7-4991

© Yutaka Miyaji, Mutsuro Kai 2008
ISBN978-4-625-43407-5

Printed in Japan
協栄製本

はじめに

日本語・国語の分野だけでのことではないが、研究と教育とその運営は、三者一体となってはじめてその分野の力となる。学界・教育界だけのことでもないだろう。明治書院刊行の月刊誌『日本語学』は、研究と教育を結ぶ理念のもとに出版活動を続けているが、昭和57（一九八二）年創刊以来、早くも27年になろうとしているので、時折バックナンバーを求める声を聞くようになった。

この際、シリーズとして復刊を考えたいという明治書院の意向を受けて、平成17（二〇〇五）年、『「日本語学」特集テーマ別ファイル』として、「1　意味I」「2　意味II」「3　語彙I」「4　語彙II」「5　漢字・漢語」「6　IT関連」の6冊を刊行したが、幸いにも好評を得ることができた。また、上記6冊に収録できなかった特集やそれ以外のテーマに関する要望もあり、このたび、この6冊をベースに、さらに点数を増やして、手頃な普及版を刊行することになった。

本シリーズは、臨時増刊号を除く特集号の題名と内容の概要によってまとめてあるが、主としてその量に従ったので、その点おのずから斯界の大勢が読み取られることだろう。言語要素と直接結びつかないものもあるが、現代のわれわれの言語行動・言語生活を反映するものと言えるだろう。

この普及版が、おおかたの要望に応えるとともに、日本語学・国語教育の発展に多少とも寄与することができれば、誠に喜ばしいことである。

平成20（二〇〇八）年4月

編者

「日本語学」特集テーマ別ファイル　普及版　意味4　◆目次

はじめに　……　i

擬音語・擬態語

擬音語・擬態語の言語学　……　堀井令以知　2
古典の擬音語・擬態語――掛詞式の用法を中心に――　……　山口　仲美　11
朝鮮語の擬音語・擬態語　……　青山　秀夫　21
中国語の擬音語・擬態語　……　松本　昭　30
英語の擬音語・擬態語――主として日本語との対比において――　……　筧　壽雄　36
子どもたちの擬音語擬態語　……　安居　總子　44

色彩語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私の色彩語観……木原　茂　56
色感と語感――色彩語のみかた――……小林　重順　60
色彩語管見……佐藤喜代治　66
色名の語彙システム……柴田　武　70
色彩語について……堀井令以知　75
私の色彩語観……三宅　鴻　79
日本文学と色彩語……伊原　昭　84
漢文の色彩語……水上　静夫　93
作品・作家にみる色彩語
伊勢物語……内尾　久美　100
徒然草……秋本　守英　105
色はどこに？　色彩語から色彩像へ――『雨月物語』の小説性――……青木　正次　109
子規・茂吉における「赤」の表現……長谷川孝士　113
色彩語の語源――日本・ドラヴィダ比較言語学による究明――……藤原　明　118
色彩イメージと色名イメージ――ミドリの事例――……近江源太郎　125

擬音語・擬態語

1986年7月号（通巻45号、vol.5-7）

擬音語・擬態語の言語学

堀井　令以知

言語記号は一般に恣意的な性質を持っている。「山」とか「海」のような語は、音形と意味の関係は有縁ではない。ところが、どの言語でも、音形と意味の関係が有縁的な語がある。物の破裂する形容の「パン」「パチン」、物をたたく時の「トントン」、物を落として割れた時の「ガチャン」などの語は、音形と意味との間に有縁性が認められる。これらの語は擬音語である。

音形と意味の有縁性を「音的有縁性」という。音的有縁性には二つのタイプがある。その一つは、擬音語のように、語の表現価値が直接的模倣による場合である。原則的に、それらの語は感動詞の引き起こす印象に近い。直接的音の模倣による語を、ヨーロッパの言語学者はオノマトペと呼んだ。オノマトペの語源はギリシャ語の「語の創造」を意味する。それは、語彙の創造的手段の一つだからである。従って、極めて異なる諸言語のオノマトペ創造の間には、並行性が見られる。音的に有縁の語を比べると諸言語で類似の形に出会う。日本語のカッコウ鳥の名に似て、英語 cuckoo, フランス語 coucou, ドイツ語 Kuckuck, ロシア語 kukushka, ハンガリー語 kakuk など。こうした類似は系統論的親族性によるものではない。およそ類似の方法で、諸言語が鳥の声を認め、再生したためである。

音的有縁性の第二のタイプとして、擬態語がある。鰻がヌラリクラリ、独り言をブツブツいうのように、ヌラリクラリ、ブツブツは、音に直接の関係がないのに、その語の音が感覚的印象を現している。抽象的観念や心理現象をも現すことがある。擬態語を「表現的語」という人もいる。

母音の表現価値について、体系的分析が試みられている。前母音は明るい感じを、後ろ母音は重い感じの母音といわれ

る。明るい母音は、口の開きが最小で、鋭い母音である。i, y は、鋭い聴覚印象、突き刺す感じ、苦悩の表現の語に適用される。明るい母音は、明るい性質の語に適し、小さいさま、軽さ、速さを示す語にふさわしい。現在形を明るい母音で、過去形を重い母音で示す言語もある。ドイツ語の現在形「歌う」は singen であり、過去形、過去分詞形はそれぞれ sang, gesungen である。同じ音の対立は、空間を示す語にも見られる。フランス語の「ここ」は ici,「あそこ」は là で母音の対照がある。ハンガリー語の itt「ここ」と ott「あそこ」の関係にも見られる。

音象徴についての音義説は、洋の東西を問わず古くからあった。母音の i は小さい観念を示し、u は大きい観念を示すというような象徴音の等式は、明らかに生理的な根拠を持っている。i の音色は、小さい概念と並行しているという。例えば、英語の bit「小部分」、tip「先端」、pip「さいころの目」、little「小さい」、wee「少量」、teeny-weeny「ちっぽけな」、フランス語の petit「小さい」、イタリア語 piccolo「小さい」のように。ところで、i を含む英語の big は「大きい」意味で、ドイツ語の Riese は「巨人」であるから、矛盾するという意見がある。しかし、一部の不都合さを楯にして反論してみても、この事実を弱めることにはならないだろう。もっとも、音に普遍的シンボリズムを認めるとすれば、生理的にも心理的にも、人間言語として、ある特徴が魅惑的で、他の特徴がそうではないと考えてよいことにならないであろうか。そうだとすれば、諸言語は進展するから、最も魅力のある特徴だけが残り、不都合な点は捨てられたはずである。ところが、魅力のある特徴だけが残ったわけではない。音と観念のあいだの関係は、そこに決定的な価値判断を下し得ないものがある。小さいことは、細かさ、繊細さに通じる反面、ひ弱さ、貧弱さにも解釈される。

擬音語や擬態語は、語の創造、命名に大きな役割を果たしてきた。幼児が言語を習得するとき、成人の物言いをそのまま模倣するわけではない。幼児の創造による語もある。自然の音から、命名された語もあるに違いない。アネ「姉」のような語などは、おそらく幼児が自然の保護者にたいして言いやすかった語音の採用ではあるまいか。また、テテオヤのテテ、トトも幼児が父親を呼ぶ時の音声の採用ではなかったろうか。成人の語の不完全な模倣と幼児の創造する語の採用の交錯として見なければ、たちまち行き詰まる語源も多い。神仏をノノサマというのも、幼児がノウノウと祈るとみた結果であろう。

母の呼び名を幼児が発音しやすいので、英語から借用したママを家庭で使うようになった。ところが、日本の方言には、ママを母のことではなく、男系の呼び名に用いているところがある。祖父、老人、若い父親をママといい、父をマー、マーサという方言もある。ママに近いナナを母の呼び名とし、

兄をナーコ、ナーヤ、ナナーという土地もある。沖縄の国頭（くにがみ）では姉はマーマーという。

関東から北では、雄牛をベコ、ベーコといい、西日本で子牛をベコという。ベコは牛の鳴き声に基づく語である。燕のツバも鳴き声からで、スズメの声は、今ではスズとは聞こえにくいが、古代人の感覚では、鳴き声の形容にふさわしかったものらしい。尤も、スズメは、もとは、小鳥の総称であった。ホトトギスもまた、鳴き声に由来するという。鳥の鳴き声にも変化があり、喜びや悲しみの表現があるように思われる。ホホジロの鳴き声を「一筆啓上つかまつり候」と聞き、ヒバリを「天まで上がろう」と聞いた人もいた。

シジュウカラの名は、鳴き声からに違いない。シジュウと鳴く小鳥の意味ではなかったか。クラ、カラはかつて小鳥の総称であった。鳥の鳴き声の名称が各地で様々に変わることがある。ホトトギスの鳴き声については、いくつかの聞こえかたがある。テッペンカケタカとか、「特許許可局」と聞こえるという。昔話に由来する鳴き声もある。ホトトギスは、昔、弟を疑って殺した兄の霊が、その罪を悔い嘆き「オトト恋いし」と鳴くのだという。

ホトトギスの鳴く時節になると、モズが黙るという。モズが唐の国から寺の仏、本尊の掛け図を盗んできたのを知っていたホトトギスが「ホンゾン掛けたか」と鳴くからだという。また、モズは、ホトトギスに借りがあり、その返済に、モズが蛙を取ってきて、枯れ枝に突き刺しておくようにと約束した。それでホトトギスがトッテカケタカと鳴いて催促するのだという。

擬態語は子音や母音の交替によって、象徴的な意味を持っている。カラカラ、キリキリ、クルクル、コロコロのように、母音の交替が意味の差異を作っている。アフリカのヨルバ語では、低音調と高音調の対立が、「太く、大きい」意味の語と、「細く小さい」意味の語の違いを示す。アメリカ・インディアンの言語には、子音の交替を形態論的に利用して意味を対立させているものがある。今年の五月、筆者はスー・シティにあるモーニングサイド大学を訪れた。スー・シティは、スー族ゆかりの地であるが、かつてスー語においても、子音の対立による音象徴が認められた。ダコタのスー語では、「黄色い」は zí,「黄褐色の」は ží,「褐色の」は ǧí である。又、sóta「明るい」、šóta「どんよりした」、xóta「灰色の」の区別もある。母音の交替によっても、オノマトペの意味に差異を作っている。kpi は、軽い音を示し、kpɛ は棒で棒を打つ音、kpa は爆竹のような鋭い音を表す。

昔の人にとっては、自然界の音響は意味を持つものと考えられていた。そのために自然音を模倣して言語記号とすることは、幼児の言語習得と同じように行われた。日本語に擬音語が多いのは、自然音の導入に日本人が特に敏感であったためかも知れない。擬音語によって、古くから、音を象徴的に

組み合わせ、言語使用者にたやすく公認されるように語を作る能力が昔からあり、幼稚と思われる新語も軽蔑して斥けることはなかった。擬音語の創造は単に理屈だけのものではない。

水の音は擬音語になりやすかった。各地に残る地名、ドドメキ、サワメキ、ガラメキは、水の音に基づく命名であった。川の瀬をザザ、水門をゾウ、堰をドンドというところがあり、下水の水溜まりをドブというのも音の模倣に基づく。小川のセセラギも同種の造語と見られる。中国地方で雷をドンドロ、ドンドロケ、ドンドロサンと呼ぶのも、動詞のトドロクより古かったかも知れない。

擬音語は、物音や動物の鳴き声を直接模写する。外界の音響を模写して作った擬音語は、音声の性質によって外界の音に近い描写を行う。無声破裂音のpは、有声破裂音のbにたいして、音色が澄み、はっきりした調子の協和音に対応するが、bはどちらかというと、濁った音色の不協和音に聞こえる。例えば、笛の音は、ピー、プー、ピューのようにp音で示し、船の汽笛はボー、ブーのようにb音が使われる。物がきしみ、こすれる擬音語には、k,gの音による擬音語が多い。ギシギシ、ゴシゴシ、カサカサ、ガサガサなど。轟く物音には、d,gやr音が入る。ガチャン、ゴロゴロ、ドシン、ガタンなど。ドイツ語では、雷鳴をDonnerという。

擬態語についても音声の照応関係が見られる。滑らかな進行を摩擦音があずかり、スルスル、スラリ、スンナリ、ツルツルなどという。急な変化や動きには促音的効果が見られ、サッサ、トット、ヒョッ、ニュッのような擬態語がある。震え動くさまにはラ行音が使われる。フラフラ、ヒラヒラ、キリキリ、グルグル、ヨロヨロ、ノラクラ、ゾロゾロなど。このように、音のそれぞれの性質によって、その組み合わせが、多様な音象徴を引き起こし、造語の新鮮さをも目指すことができる。日本語への採用を幼稚なこととして斥けなかったことも、われわれの先祖の知恵であり、感性ゆたかな言語を造ってきた先人の才能の現れであった。

音の表現力は、すべての人にとって不変の承認できる特性ではない。擬音語は、感じ方の条件にかかわるといえる。実際に、音の表現性は、三つの変異のタイプを必要とする。それは、第一に文脈により、第二に話し手の気質により、第三に言語の進展によって変わる。

純粋に知的な談話は、表現価値を必要としない。科学論文、公文書、商用文では感情表現のニュアンスは、むしろ避けられる。感情性に溢れる談話では、音に潜在するあらゆる手段が働く。イントネーション、感情のアクセント、長音化などが感情効果を高めるのに役立つ。話し手の気質や感受性、想像力、文学的教養、趣味など主観的要因は、表現事実の評価に大きな位置を占める。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

音の表現性は、語に不変のものではなく、変化するものである。ソシュールがいうように、フランス語の fouet「鞭（むち）」は、擬音効果があり、それは音声変化の偶然の結果と見られる。この語は、ラテン語の fagus「ぶなの木」に由来するが、かつてラテン語では音と意味は無縁的であった。フエと発音すると、フランス語では、鞭のうなる音を連想する。これに反して、ラテン語の pipio「鳩」は擬音語の価値を持っていたのが、フランス語の pigeon「鳩」は、その音感からする語の表現性を失った。

語の形の進展によって、音の表現性が変わるだけではない。形と並行して意味も変化する。ラテン語の murmur とフランス語の murmure の間には、かなりの意味の差異がある。ラテン語の意味は、「うなり声」「鈍い物音」を模倣している。フランス語の意味は、「小川のせせらぎ、風のささやき、つぶやき、ひそひそ話」である。

音の要素の影響を受けて、語の意味が変わることがある。ローマの弁論家キケロの名が、イタリア語では cicerone「観光ガイド」の意味になった。チチェローネという音が、ペラペラとしゃべるガイドの意味を作ったのである。

音の表現性は、音と意味との調和に基づくことは、言うまでもない。同音語を比べて見れば、このことは明らかである。物の軽く触れ合う音の「サラサラ」と、「今更」の意味の「さらさら」とを比べると、擬態語のサラサラは、語の形が聴覚印象と結び付いているのに、今更の意味の語ではそうではない。同様に、時計の音を示すチックタックは、音と意味とが調和して感じられるのに、タクティックス（tactics「戦術」）ではそうではない。

日本語の擬音語・擬態語の中には、同じ語形であっても、意味の違うものがある。チラチラは、桜の花がチラチラ散る意味、強い光で目がチラチラする意味、こちらをチラチラと盗み見る意味など文脈で異なる。プンプンは、臭いがプンプンする場合、プンプン怒る場合、ともに同形が使われる。日本人の繊細な自然現象に対する感覚から、風が吹くさまを、ヒューヒュー、ピューピュー、ビュービューと形容し、雨がシトシト、ザーザー、雪がチラチラなどと表現するのは、感性的に優れた国民性に因るものと思われる。

我々の少年時代に読んだ「のらくろ」「冒険ダン吉」のような漫画と違い、近ごろの漫画には、擬音語・擬態語がふんだんに取り入れられている。富塚真弓の漫画「赤い屋根のポプラ荘」を見ると、時計の音をチッ、チッ、チッッ、風をヒュー、びょおおお、ヒュウウウ、ガタガタ、ヒュルルル…ガタガタッ、呼び鈴をピポーン、ピポーン、ピポーン、吹雪のおさまった静かさを「しんしん、しんしん……」と表現するなど音の表現性に富んでいる。感情の起伏を音象徴に託して漫画の筋の運びを円滑にしている。

擬態語は俳句の中にも取り入れられ、表現性の造出にあず

かってきた。蕪村の有名な句「春の海　ひねもすのたりのたりかな」の「のたり」は、ゆったりしたさまを示す擬態語である。芭蕉の句にも「鳩吹けば　榎の実こぼるるさらさらと」とある。榎の実の落ちる秋風の吹く日に、鳩を取る為に鳩笛を吹く情景と、実の落ちるさらさらの音が印象的。芭蕉とその弟子の山店の両吟にも次のような擬態語の使用が見られる。

からびたる　くぬぎ林に　日がくれて　　山店
仏の木地を　つつむ糸だて　　芭蕉
ころころと　臼挽き出せば　ほととぎす　　山店

寒い夕がたのくぬぎ林の中を、仏の木地を背負った者が歩いて行く。糸だては、縦を麻糸で、横を藁で編んだむしろで、包んだ物の形が外からよく分かる。多分、彫刻した仏の木地を塗師(ぬし)のところへ持って行くのであろう。「ころころと」の付け句は、糸だての包みがそのまま転がっているさまを形容し、塗料を細かくするために挽く臼の音と結び付けたもの。「ころころと」は、ひとつの音にまとまって、ほととぎすの鳴くのが耳に留まったという付け句である。このように、擬態語の使用が二重の意味のニュアンスを与えて、味わいのある句にしている。

擬音語・擬態語を用いなくても、一定の音を詩句の中で繰り返して用いると、表現性が高まり、印象効果が挙がる。このことも音の象徴性につながる。柿本人麻呂の次の歌では、「タ」音の繰り返しによる印象が効果的である。

「……高殿を　高知りまして　登り立ち　国見をせせばたたなづく　青垣山……」(万葉集　巻一、三八)

この箇所では、「タ」音が押韻によって繰り返され、雄大荘重さを印象づけている。尤も、こうした印象音声学的解釈において注意しなければならないことがある。音声の繰り返しによる印象効果は、あくまで結果的に音と意味が調和したときに言えることであって、ア・プリオリに考えるべきではない。

ホメーロスのオデュッセイア第一巻56―57行の流音の1の繰り返しは、甘い言葉の表現に適している。

aieì dè malakoîsi kaì haimulloîsi lógoisi thélgei

「彼女はいつも柔和な優しい文句で、彼をだまし魅する」

落語の「たらちね」には、長屋の八つぁんと京都のお屋敷者の花嫁との間の対話におかしさがあるが、擬態語の対照効果がこの落語に見られる。八つぁんが、花嫁との生活を稽古するところで、たくあん漬けをかじる音は対照的である。八つぁんは、「ばーりばりのざーくざく」、花嫁のかじる音は「ぽーりぽりのさーくさく」である。間(あい)の手に箸が茶碗にぶつかって「ちんちろりん」と音を出す。

落語「寿限無(じゅげむ)」は、長い名前を子供に付けたために、おかしなことになる話しであるが、熊五郎が和尚から聞いて、良い名前の総てを並べて付けた名前には、擬態語が入

って面白みが加わっている。その名前は、「寿限無寿限無、五劫のすりきれ、海砂利水魚の水行末、雲来末、風来末、食う寝るところに住むところ、やぶらこうじのぶらこうじ、パイポパイポ、パイポのシューリンガン、シューリンガンのグーリンダイ、グーリンダイのポンポコピーのポンポコナの長久命の長助」である。

童歌にも擬音語・擬態語が導入され、幼児の自然の音象徴が反映している。京都の子供たちの「げた隠し」の遊びに唱える童歌がある。「げた隠し、チュウネンボ　はしりの下のネズミは、草履をくわえて、チュッチュクチュウ、チュッチュクまんじゅうは誰が食(く)た、誰も食わへん、わしが食た。」チュッチュクチュウのような擬音語は面白さを加えている。

名指し遊びに歌われる「京の大仏つぁん」の童歌には、寛政十年に雷火で焼けた方広寺のことを偲んだ表現が見られる。

「京の京の大仏つぁんは、　天火で焼けてな、
三十三間堂が、焼け残った。アリャ、ドンドンドン。
コリャ、ドンドンドン。
後ろの正面にどなた。　お猿、キャッキャッキャッ。」

この歌の中の「ドンドンドン」は方広寺の大仏が焼けるさまを形容したもの。「キャッキャッキャッ」は、群衆の騒ぎとも解される。我々も幼年の頃に唱えた「郵便屋、配達屋、　もう、かれこれ十二時や。エッサカ、ホッサカ、ドッコイショ。」の「エッサカ、ホッサカ」のような擬態語は、かつての郵便配達の情景を偲ばせる。

詩の中でも、擬音語・擬態語が、時に用いられて、喚起的表現効果を造出することがある。北原白秋の次の詩には、それぞれ擬音効果が認められる。「花火」という詩の一節。

花火が消ゆる。
薄紫の孔雀（くじゃく）玉……紅（あか）くとろけてちりかかる。
Toron……Tonton……Toron……Tonton……
色とにほひがちりかかる。
両国橋の水と空とにちりかかる。

ローマ字で「トロン……トントン」と表記して、花火の消える様子を描写している。また、白秋の「乱れ織」という詩では、機（はた）の梭（おさ）の音を「とん、とん、はたり」と形容し、「高機」という詩では、次のように「きり、はたり」と音を模写している。

高機（たかはた）に
梭（おさ）なげぬ
きり、はたり

西陣の織屋では、機の音を「きり、はたり、ちょう」と表現している。

西洋の詩においても、擬音語の使用によって表現性が高まることがある。ウェルギリウスのアエネーイスの次の行には

murmur「ざわめき」が擬音効果をもたらしている。

Interea magno misceri murmure coelum／Incipit：

……（第四巻-160）

「そのうちに巨大な混然と鳴り響く轟音が、空に始まり」

日本語の擬音語・擬態語に比べて、英語のオノマトペは、どのような語について言うのであろうか。英語では二種のオノマトペのタイプがある。第一のオノマトペは、外界の音を音声模写したものである。音声と意味は反響しあい、聴覚的経験によって音声構造が作られている。例えば、蜂のうなりを buzz, ピシャッという音を crack, ごろごろ鳴るを growl, 蜂がぶんぶんいうのを hum, 鼠がチューチュー鳴くのを squeak というなど、音声模写のタイプである。

第二のオノマトペとしては、音声が聴覚的経験によらないで、動きや生理的・道徳的性質の意味を呼び起こす語がある。音象徴が意味と結び付いて語の内容を喚起する。gloom「薄暗がり」、mawkish「吐き気を催す」、slick「滑らかな」、slimy「どろどろの」、sloppy「ぬかるみの」、sluggish「のろのろした」、wry「ねじれた」のような語がある。

同じ音結合によって、いくつかの意味の造出にあずかることがある。／sn／は、sniff「鼻をすする」、snuff「鼻から吸う」、snore「いびきをかく」のように息の音に結び付くこともあり、snip「挟みで切る」、snap「火がパチパチいう」、snatch「素早くつかむ」のように、速い分離、速い動きを示すこともあ

る。また、snake「蛇」、snail「かたつむり」のように、はう動作と結ぶ語もある。語頭の音の機能が意味と関係するほか、次のように語末の音が、大きい音や光などを示すのにあずかっている。blare「らっぱが鳴り響く」、flare「ゆらゆら燃える」、glare「ぎらぎらする光」、stare「じっと見る」のように。

英語でも日本語と同じように、オノマトペが母音の交替によって、違った音感をもたらすことがある。flip「弾き飛ばす」、flap「ピシャリと打つ」、flop「バタバタ歩く」では、母音の交替が意味のニュアンスの差異につながる。gleam「きらめき」とgloom「薄暗がり」の間にも、音感による差異が認められる。(Stephen Ullmann : Semantics, An Introduction to the Science of Meaning, 1962, p. 84)

日本語にオノマトペが多いと言われるが、自然に親しみ、自然界の音を、言語と同じように意味のあるものと、我々の祖先は考えていた。そのために、外界の音を模倣して語を造出することは、極めて自然のことであり、幼児の言語習得と同様に容易なことと考えられた。それが、日本語に多くの擬音語・擬態語を作る結果となった。その造出に当たっては、英語圏の人達以上に語音の変化に関心を持ち、語の構成を新しく、複雑にしようと心がけたためかも知れない。語音の結合法は、昔から新語を作り出す重要な手引きとして、擬音語において、とくに適切で容易な言葉作りがなされてきたのである。

幼児の案出したかと思われる擬音に基づく語も、日本語の活力と新鮮さのために、時代の要請に応えて、それを軽んずることなく採用し、日本語に柔軟性を育んできた。春の草タンポポは、もと、つづみを意味する幼児語に由来する。つづみの音を写したのが命名の動機である。つづみをタンポポと聞いた音に加え、手折った茎が、つづみと似ているので転用したもの。タンポポは、花生けや、竹の筒の名前にもなっている。雛祭りに灯りをつけるボンボリも、擬音に基づくという。紙などで覆った手燭(てしょく)で、紙を張った器物が触れる音からの命名という。

どの言語にも多少ともオノマトペが見られる。バスク語のような言語でも、よく使用する次の語がある。haia-haia「速い歩行」、dan-dan-dan「鐘」。母音i, aの変化の繰り返しによる語もある。krik eta krak または、krik-krak「バリッ、メリメリ」、pinpi-panpa「激しく打つ音」。(Abbé Arotçarena : Grammaire Basque, 1951, p. 24) このようにオノマトペは、多くの言語において、音象徴の普遍的事実として用いられている。

(ほりい・れいいち　関西外国語大学教授)

古典の擬音語・擬態語

——掛詞式の用法を中心に——

山口仲美

一　はじめに
二　一般的用法
三　葉ずれの音
四　けものの声
五　虫の声
六　鳥の声
七　語の形態
八　むすび

一　はじめに

すでに指摘されているように、日本語には、擬音語・擬態語が、おびただしく存在している。われわれ日本人は、それらを自在に駆使しながら日常会話を行なう。もちろん文章も書く。

ごく一般的な現代の擬音語・擬態語については、辞典も刊行されているので、この稿ではふれない。ここでは、古典に見られる擬音語・擬態語のうち、一風変わった掛詞式のものに注目し、その性格を解明してみたいと思う。なお、古典といっても、平安時代を中心として話をすすめる。

二　一般的用法

擬音語・擬態語は、ふつう次のように用いる。

応天門ノ上ノ層ヲ見上タレバ、真サヲニ光ル物有リ。暗ケレバ何物トモ不見エヌ程ニ、嘰ヲ頻ニシテナムカヽト咲ケル。頭毛太リテ死ヌル心地シケレドモ、（『今昔物語集』巻二七第三三話）

深夜、応天門の傍をたった一人で男が通ると、真青に光る物がある。それは、人の気をそそるように鳴いたかと思うと、いきなり「カカ」と大声で笑う。恐怖の余り、その男は死ぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com